

句
遊

第十一集

平成二十五年三月

序に代えて

六 川 二 郎

「句遊会」は平成二年三月に監査懇話会の生涯学習部会の一つとして発足し、同年四月から、毎月句会を行い、爾来二十三年になり、本年三月には第二七七回目の定例会をもつことが出来ました。各自の作品の発表の場として「句遊」を二年ごとに作ることにしており今回が第十一集となります。

この句遊会の特色は、宗匠は置かず会員同志が句会を中心として、遊びと親交により互いに切磋琢磨して俳句を楽しむという方針です。そこで宗匠が不在では句の質的向上が見られないのではないかというご心配を頂くかと思えます。ついては読者の皆さんが興味をもって読んで頂き、共鳴される句、問題があるのではないかという句など、ご指摘頂ければ幸甚です。

私どもは、これからも具眼の読者の皆さんを怖れ

て精進してまいりますので、自己点検を確認し、明日の作品の充溢に努力する所存です。また生存中の辞世の句にも対象を広げたいと思っています。一期一会といわれるこれまでの人生をふりかえり、これから迎えるであろう死を見つめ直すのです。これも俳句人生の素晴らしさの一端だと思いますが如何でしょう。

(付 記)

平成二十三年、二十四年度句遊会の活動状況

月例句会：平成二十三年三月 第二百五十三回

写友会、画友会との合同展

第十七回合同展 平成二十三年 三月

第十八回合同展 二十四年 四月

第十九回合同展 二十四年 九月

吟行句会：平成二十三年四月 小石川後樂園

二十三年十月 湯河原温泉

二十四年四月 皇居東御苑

二十四年十月 塩原温泉

目次

新天守閣	石野喜粹	六
酔芙蓉	生江沢広雄	八
閑適の日々	六川里風	一〇
時の殻	清家静楓	一二
大震災から二年	佐藤政百	一四
去年今年	向井眉山	一六
晩夏光	宮川至剛	一八
家族のことなど	眞田宗興	二〇
海の幸	森邦彦	二二
サングラス	勝田冬川	二四
ゆらぎ	中山知祐	二六
折々の出会い	大仲正敏	二八
夏の星	石原克己	三〇
にちにち抄	安井正浩	三二
発展途上	城戸崎雅崇	三四
ひねもす	藤原啓隼	三六
大櫂	石原尚文	三八
今を生く	鈴木充郎	三九

作

品

五

新 天 守 閣

石
野
喜
粹

黒髪も背丈も変り初写真

次ぐ酒や一別以来の春灯下

ちと派手に心春めく旅支度

石垣と櫓に名残り城の春

墨東に新天守閣春うらら

新緑に隠くる高尾の行者道

乾杯の発声を待つ冷奴

影二つ即かず離れず花火の夜

かなかなの声にしづもる谷中かな

鐘の音に聴き耳立てる立葵

駅弁を開く車窓の秋日和

湯河原の瀬音さやけき薄紅葉

秋風や人待ち顔の縄のれん

山肌の日の色かへす薄紅葉

ひたむきに一隅照らす石路の花

冬ざれや津軽三味線骨にまで

冬晴れや威風堂々帝都駅

終電車忘年会のシンデレラ

新しいもの、より高いことを求めるのが若さかと、スカイツリーも一つの象徴です。好奇心と向上心を持つのが初心を忘れない為に必要なことでしょう。

酔 芙 蓉

八

生江沢 広雄

つつがなく米寿を迎ふ去年今年

山眠る落暉静かな相模灘

涸れ滝の岩間に生れし露の臺

薄氷や空閉じこめり桶の中

春寒し暗き御堂の閻魔王

なんとまあこれが艾かさしも草

大仏の居眠りもあり山笑ふ

蒼天や枝垂桜の風の息

新緑や影を映して鳶の笛

鱒を干す海辺の雲の迅きかな

大夕焼伊豆の山々燃えつくし

芋虫の風に吹かれて昼寝かな

かなかなや暗き灯影の露天風呂

路地裏に陽を呑み込み酔芙蓉

夕暮や野地に散りゆく花木槿

山茶花のかげりし花の寒さかな

山は暮れ枯野の風に鐘の音

枯蓮の敵味方なし源平池

閑適の日々

一〇

六
川
里
風

幼な児が常に主役や初笑

日だまりの方へ群れをり寒雀

ひこばえや倒れし跡の大銀杏

池の面に浮き来る鯉や春兆す

春愁や雀も首をかしげをり

偲ばるる松の廊下や落ち椿

老松も若木もこぞり緑立つ

須らく身軽になりて更衣

明るさもありてよく降る夏の雨

青空へ咲き上りゆく立葵

夏深し過去呼び戻す恋挽歌

憂きことのいつしか去りぬ秋の天

古里は異国となりぬ盆の月

秋風も死の跫音もうしろより

三味の音の妻の一日や小六月

拾ひものせしごと一日冬日和

風花の舞ひゆく彼方遠浅間

去年今年閑適の日々あればよし

私は還暦を過ぎてから通信講座で俳句をはじめました。毎月十三句は作る事になっています。考え方は、駄句でもよいから沢山作り、沢山捨てて名句を一句残し、生きているうちに辞世の句を残すつもりです。

時
の
殻

一一一

清
家
静
楓

初笑夫婦漫才浪花寄席

佗助や御為ごかしの身を恥じめ

時の殻破り顔出す落の臺

春めくや孫娘にも薄化粧

鳥歌ひ人朗らかに山笑ふ

春嵐松の廊下の刃傷沙汰

樟若葉少し老いの葉残りけり

鬼百合のかすかに揺れる藪の中

駅つなく色さまさまの七変化

作務衣干す禅寺僧の晩夏かな

送り火や明日から二人だけの日々

天空のスカイツリーに宿る月

野分あと清き流れの箒川

茶の花やためらいがちに咲き初めし

冬ざれや舳ひしまゝの被災船

熱爛や盃重ね愚痴重ね

物入れの脚立取り出す年用意

終に行く道まだ遠き年の暮

大震災から二年

佐藤政百

孫たちの言ひぐさ長けて初笑い

地震に耐へ古き住居や鬼やらひ

液状化の街にしとどの春の雨

除染待つ人なき街や春寒し

浜駆ける子等の掛け声春動く

絨毛の光のしづく猫柳

いとほしき風にからみて雪柳

移り香の指に遺りし蓬摘み

地震知るや知らずや花の咲き初むる

メルヘンの国にいざなふ虹の橋

百合折れて花の多きを悔ひにけり

消えてなほ闇に残像大花火

ひぐらしやそのひぐらしのしまひどき

風紋を描く真砂や晩夏光

老いの身を追い越しゆくや秋の風

月光下竹喰ふ野象音ふるる

散る姿見せず消えゆく帰り花

風花の長き旅路の終着地

去年今年

一六

向井眉山

初富士や会釈して入る露天風呂

微笑しちちははあねや初夢に

青春は還り来ぬ夢去年今年

畦道にぼぼぼぼぼと露の臺

ひしもちや五分遅れの花時計

風に揺れ光に揺れて花馬酔木

一しずくまた一しずく春の水

ほろ苦き露かみしめて母のこと

翡翠の一閃ひすいを放ちけり

白玉をするりと食べて嘘一つ

紫を雨に溶かして濃あじさい

ながらへよ昭和一桁いわし雲

フェルメールの少女の瞳酔芙蓉

天も地も子らも笑顔や豊の秋

風に舞ふ真白き波や蕎麦の花

木漏れ日や羅漢と遊ぶ寒雀

苞割れば色即是空寒牡丹

群青のあくまで蒼し風花す

晩 夏 光

一八

宮 川 至 剛

ことよせし賀状の隅の想ひこそ

金婚の年と妻告げ笑ひ初む

雲の色日の色変へて土手青む

雪解島黒土出づる光かな

銀尖る木蓮の芽の蒼天に

花びらの薄日をとかす糸桜

老いてなほ一途なる紅糸桜

新緑や授乳まばゆき日の光

装ふも鎧ふも人やサングラス

晩夏光湖面移らふ山の影

祇園茶屋老妓の威儀の涼しさよ

抜けてゆく小路に祇園囃子かな

恋の沙汰遠き齡や走馬灯

亡き人に問ふ秋風の中にあて

ぶな百幹白に装ひ秋閑る

冬麗に応ふ櫂の千手かな

冬はじめ形見の袖羽織り初む

どこまでも行けと枯野の道しるべ

家族のことなど

眞田宗興

スカイツリー寸車豆人霞下

初雪や昭和の街が懐かしき

陽炎や江古田ケ原の兵の塚

雪やまぬ屋根と空との境なし

老いた木といえど若葉の青臭さ

梅雨なれど兄のメールは「転移なし」

薔薇いっぱい百一歳の母の庭

父ありてこの湖見たし夏が来ぬ

人生にはぐれ星あり天の川

孫と食う海軍カレー猛暑かな

登り坂見えて入道雲の下

蝉よ鳴け泣いて嘆いて死ぬるらん

台風が来て去りてまた来るらしや

秋風や息切れすると妻が言い

紅葉狩り「そうだ京都へ」乗せられて

年ばかり仏に近づく除夜の鐘

年越しや兄のいのちの凄さかな

年の瀬や私の居るところちょっとだけ

海 の 幸

森 邦彦

生え初めし齒を見せ孫の初笑

托鉢の声さえ凍る京の朝

懐かしき小川の畔猫柳

摘む草の色も班に蓬餅

あでやかに大奥跡の大桜

小雨降る石堀小路に夏立ちぬ

垣根越し花にこやかに立葵

宿の朝鯨の干物で迎え酒

沙羅の花散り敷きて後なお白し

照りつける日差しに赤し百日紅

長岡の天空覆ふ大花火

惜しまれつ咲いては萎む芙蓉かな

溪流の瀬音の陰に紅葉の湯

天高く出湯見守る逆さ杉

葉を広げ凜として立つ石路の花

岩肌を出づる白糸富士の雪

ただ白き越の野原に冬日和

風花の舞い散る市に海の幸

初参加以来、句集も三集目となった。少しマンネリになってきた。更に素直な心で、景色を見よう。自然の豊さをもっと面白く楽しく表現したい。

サン
グ
ラ
ス

勝
田
冬
川

それぞれの友に語りつ年賀状

正月に食べすぎ床に倒れこみ

春寒や今日も負けずに一万歩

葉にふれて目覚め跳びだす雨蛙

生花の趣を増す猫柳

歳相応露のおかずで食すすみ

満天の星を仰ぎつ夜釣船

サン
グ
ラ
ス
己の性を押し隠し

百日に咲く花散る花百日紅

夜更けまで友と語らむ月夜酒

老夫婦夕食かざる初秋刀魚

冬晴れや野川のほとり歩の弛む

木枯らしや夜ぎめの床にひびきをり

冬ざれの尾根をかすめて雲ながる

風花の美しき便りに無事を知り

朝まだき静寂やぶる寒雀

冬の雲渡る形もそれなりに

清貧の母の愛せし寒椿

ゆらぎ

中山知祐

たからかに千歳の歌やカルタとり

書初めや墨するときのもどかしさ

猫柳空にねずみを追ひにけり

さくらばな大空つかむ風の糸

隅田川春のゆらぎを楽しめり

立葵空に伸びゆく花梯子

新緑の色合い微妙無限見る

いつのまに紅のすだれやぐみたわわ

モンシロチヨウ空と大地を揺らし舞ふ

炎天下葉っぱのいのちまつさかり

ひぐらしの透きとほる身や声かなし

花の紋高砂芙蓉孔雀の美

えんがわに月のよだれの団子かな

ゆらゆらと萩のすだれの軽さかな

今日もまた人の心を写す月

亥の子追ひ夕べにひびく子らの声

幼児も焚き火を守るお手伝い

しがらみもさらりと捨てて落葉かな

折々の出会い

二八

大
仲
正
敏

母の乗る飛行機来る初景色

鐘の音湖面に残し去年今年

山ガール若さ弾けて山笑ふ

江戸切子グラスの中の火花かな

家の灯を後ろにおいて夜釣りかな

ヒマラヤの神秘持ち込む青い芥子

佇める妻の肩越し葵咲く

和尚には似合わぬものにサングラス

校庭に部活の声と百日紅

蝸の友を送りし駅舎かな

老犬の道に迷いて残暑かな

思い出を駅に残して秋の風

夜も更けて明日の芙蓉を想ひけり

冬ざれや紅い襷をつなぐ声

熱爛や眼鏡曇らせ豆腐食ぶ

居酒屋に誰か忘れた冬帽子

風花や田舎のバスの遅れ来る

木枯らしの友を急き立て蕎麦屋かな

窓の外には雪が降っています。いつもの散歩コースである「自然公園」へ行くことも出来ません。池の畔にある開花したばかりの小さな黄色い花の上にもかなり降り積もっていることでしょう。その甘い香りは暖かい春が近くに来ていることを感じさせてくれます。

夏の星

石原克己

年玉に袖口かぶる小さな手

浮いた世はテレビにまかせ寝正月

富士仰ぐ御坂峠や春寒し

凜として白き侘助床の間に

遍路道お大師さまもバスに揺れ

衣更ひかりの中の女学生

波音にひとりつつまる夜釣かな

縁先の緑とびこむ夏座敷

朝靄に郭公の声谷越えて

子らの輪が花火に浮かぶ影絵かな

頂きの岩に身を寄せ夏の星

本堂にけだるき読経百日紅

白壁の続く城下や月の影

秋高し足湯に揺れる雲ひとつ

色ひとつ水打つ路地や石踏の花

木もれ日や苔にふわりの敷松葉

山黒く灯ひとつ木曾の冬

あれこれを超えて静かに年用意

にち
にち
抄

安井正浩

片隅に侘助置かれ植木市

追羽子の音の乱調裾乱す

学ぶことまたひとつ増え年始め

きさらぎの波穏やかや訃の知らせ

マネキンのひと足先の更衣

栈橋の闇に溶け込む夜釣人

冷奴無言でくずす手酌酒

百合の香に紛れ込みたるけものみち

古民家の紫陽花青を深めけり

大花火未完の空を彩りぬ

遮断機のゆつくり降りる晩夏かな

観覧車追ひかけてくる今日の月

せせらぎの文学の径秋の声

独歩の碑ただ一輪の彼岸花

ひそやかに無人の駅の石踏の花

熱爛や何も語らぬ友とゐて

冬ざれの踏切を過ぐ貨車長き

冬うららバス待つまでの足湯かな

発 展 途 上

三四

城 戸 崎 雅 崇

初富士や島の港の風強し

引き直したき神籤でて初詣

去年今年八十路発展途上哉

南仏を訪ねし記憶花ミモザ

キャンパスの日々遠くなり花の雲

秩父路の丘を隈取る芝桜

春寒や小走りに道渡る猫

嘴太き鴉とまれり夏木立

積み上げし本捨てられず端居かな

川床を予約せし日の雨模様

忘れ物したるやうなる晩夏かな

皮むけば文旦の香のほとぼしる

舫ひ船浮き輪にとまるあきつかな

バスの中迷ひ込みたる秋の蜂

秋雨や廂の広き奈良井宿

鳴く鳥の居場所を探し冬木立

木枯に吹き残されし赤提灯

炬燵寝や遅刻しさうな夢をみて

先輩句友に追いつこうと外部での勉強も。当会句を換骨奪胎するなど渾然一体となった中からの十八句。「いくらやっても俳句のできない性質の人がある」（夏目漱石）はわがことと思いつつも継続できているのは当会あればこそ。

ひねもす

三六

藤原啓隼

カラコロと下駄の音響く初詣

去年今年自然の脅威民畏る

春氷鳥踏み抜きて帰り旅

春来たり少女は裾も翻す

この日から定年迎へ春落ち葉

蛙鳴き雨ひとひとの家郷かな

杏子の実恥らひながら色気づく

桑の実を食む人もなし雨の音

梭魚干し金蠅払ふ老夫婦

遠花火音に震えへし幼な犬

夾竹桃真紅映えたる昼下がりに

越の国穂波寄せ来る雲の峰

炎天下稲葉に喰ひつく黄金虫

朝乙女宵には妖艶酔芙蓉

靄切れて雀ら集ふ落穂かな

瓢箪はぶらぶらぶらり風まかせ

秋冷に尾花かざるや水精玉

風花は夢か現か幻か

大 櫓

石 原 尚 文

初夢の中で遭遇我が小町

山門をくぐれば浄土芙蓉咲く

露座仏の苦行ありあり酷暑かな

山百合の視線の先に山ガール

主なく旧家支へる百日紅

秋の風白磁の色もひんやりと

冬日和川面煌めく小宇宙

寒星を射抜くがごとき大櫓

今を生く

鈴木充郎

特急の切りさくホーム秋の風

金木犀香る水面や箒川

木枯らしに揺れる巨木や今を生く

糠漬けをまぜるおふくろ手あかぎれ

点滴の窓から見ゆる風花かな

めぐりくる幸も不幸も去年今年

はつゆめを待つ子の寝顔愛らしや

初夢や翁のごとく名句生む

あとがき

『句遊』第十一集をお届けいたします。

本集への出品は前集と同じ一八名ですが、中路良昭氏が退会、高世庸行氏が休会され、石原尚文氏と鈴木充郎氏を新たに迎えています。

編集にあたり出品は従来通り自選一八句とし、前書き、ルビは原則として付けぬこととしておりますのでご了承ください。

俳諧の俳にはおどける、ふざける、諧にはたわむれ、冗談の意味がありますが、「俳句は単なる短い詩ではない。俳の字がなくともよいようなものなら、俳句と言わなくてもよかろう」と、俳句には人の心をやわらげ面白がらせるものも必要と、子規もいわれています。

変る世にも心やわらげ、一層のご健吟をお祈りいたします。

平成二十五年三月

編集委員

清家	静
石野	喜次
佐藤	政夫
森	邦彦
石原	克己

(石原 克己 記)